

急速に増大を認めた泌尿器領域の小細胞癌の一例

◎佐藤 龍哉¹⁾、堀井 靖久¹⁾、杉山 春香¹⁾、五十嵐 彩香¹⁾、岩崎 亜紀子¹⁾、河井 洋子¹⁾、谷崎 隆行¹⁾、勝又 俊郎¹⁾
学校法人順天堂 順天堂大学医学部附属静岡病院¹⁾

【はじめに】小細胞癌は肺に好発し、泌尿器領域では非常に稀な組織型である。今回、自然尿中に出現した小細胞癌を経験したので報告する。

【臨床情報】患者は80代男性。前立腺癌の既往があり、PSAが上昇傾向を示した為、当院に紹介受診となった。初診時には、自然尿検体が細胞診に提出された。後日、精査目的で行った造影CTでは多発肝転移・前立腺腫大及び前立腺から連続する乳頭状の隆起性病変を膀胱に認めた。その後の膀胱鏡検査で、膀胱頸部・尿道に多発する腫瘤性病変を認めた。膀胱鏡検査より約1か月後のTURBT時には腫瘤が数倍に増大していた。

【病理所見】
＜細胞診所見＞赤血球や炎症細胞、少量の壊死様物質を背景に、細胞質に乏しく、N/C比の非常に高い異型細胞が、木目込み細工様あるいは鋳型配列を呈して出現していた。核の大きさはリンパ球の2倍程度で、核の大小不同や核形不整、著明なクロマチンの増量が見られた。

このような所見から小細胞癌を推定できたが、泌尿器領域の小細胞癌は稀であり、小型の尿路上皮癌との鑑別を要した。

＜組織診所見＞充実胞巣状や索状に増殖する、クロマチンの増量した裸核状の核を有する異型細胞が採取された。免疫組織化学染色で異型細胞は、chromograninA(－)、synaptophysin(weakly+)、CD56(+)となり、小細胞癌と診断された。

【結語】自然尿中に出現する小細胞癌も、肺小細胞癌（肺神経内分泌腫瘍）と同様の形態を示した。その特徴的な所見から、小細胞癌と推定することは可能であると考えられる。泌尿器領域での小細胞癌の発生は非常に稀であり、結果報告の早い細胞診で、臨床側に方向性を示すことは有用と思われる。

【謝辞】本発表にあたってご指導いただいた、当院病理診断科 和田了名誉教授ならびに山下淳史先生に深謝いたします。